

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年5月21日現在

機関番号：17102
 研究種目：基盤研究（C）
 研究期間：2009～2011
 課題番号：21520408
 研究課題名：照応理解の認知プロセスに関するメタ表示的分析

研究課題名：A Metarepresentational Analysis of the Comprehension of Anaphoric Processes

研究代表者
 大津 隆広（OTSU TAKAHIRO）
 九州大学・言語文化研究院・准教授
 研究者番号：90253525

研究成果の概要（和文）：
 本研究において、照応表現は、音声的に顕在であろうとなかろうと、聞き手にその指示対象を低次表示（指示対象の確定のためにまずアクセスされる意図明示的刺激）の高次表示（つまりメタ表示）の中にアクセスするよう指図していると考えられる。また、指示対象を可能にする文脈想定と呼び出し可能性は、照応表現のタイプにより異なるのも事実である。文脈想定としてのメタ表示の呼び出し可能性と処理労力の違いは、その低次表示との類似性の程度の違いから生じている。

研究成果の概要（英文）：
 Anaphoric expressions, whether phonologically realized or not, instruct the addressee to access their referent within the higher-order representation (i.e. meta-representation) of a source representation (i.e. verbal or non-verbal ostensive stimuli which are first targeted in terms of referent identification). It is also evident that the accessibility of contextual assumptions enabling the identification of a referent differs according to the types of anaphoric expressions. This indicates that differences in the accessibility of a metarepresentation as a contextual assumption and in processing effort stem from degrees of its resemblance to the source representation.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2010年度	700,000	210,000	910,000
2011年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
総計	2,500,000	750,000	3,250,000

研究分野：人文学
 科研費の分科・細目：言語学
 キーワード：関連性理論、照応表現、手続き、メタ表示、解釈的類似性、呼び出し可能性

1. 研究開始当初の背景

照応、つまり照応形を用いて先行する談話と結束するという言語現象は、グライスの量の公理の第二公理（必要以上の会話への貢献をするな）やレビンソンのI原則（言わない

ことは言わなくてもわかることだ）という会話の原則が生かされた慣習的な言語の仕組みである。従来、照応プロセスの観点から、照応は語用論的制御 (pragmatic control) により成立する深層照応と統語的 (言語的) 制

御 (linguistic control) により成立する表層照応に区別されてきた。言語的制御と語用論的制御という2つの異なる制御の仕組みは、同時に人間の認知の仕組みに違いがあることを示唆していることになる。しかし、言語的制御と語用論的制御という二分法は、照応の認知プロセスに関する次のような事実をうまく説明することができない。

(1) 深層照応でも形態的・統語的制御を受ける (cf. Ryck and Verluyten (1981, 1982, 1985))。

(2) 表層照応である動詞句削除 (verbphrase ellipsis) などは、言語的先行詞なしでも用いられる (つまり、語用論的制御を受ける)。

(3) 動詞句削除や間接疑問文縮約 (sluicing) のように、表層照応でも照応形と先行詞の統語的一致がルールなものがある (表層照応の中でその程度に違いがある) (cf. Murphy 1985)。

(4) 独話で使われるよりも対話で使われた方が表層照応の統語的一致はルールになる。一方、深層照応に関する研究の動向としては、次の (5)、(6) のような対立する考え方が展開されているが、どちらも問題点をかかえている。

(5) 不在言語的先行詞 (absentee linguistic antecedent) と照応形が照応関係をもつという考え方: Tasmowski-de Rick and Verluyten (1981, 1982, 1985) では、不在言語的先行詞を仮定し、それを通して言語的先行詞を持たない代名詞は知覚された環境の中に存在するモノを指示すると考えている。同様に、言語的先行詞をもたない動詞句削除について、Stanley (2000) は知覚された環境の中の行為が、その統語的削除の言語的先行詞としてコンテキストにより顕著になると考え、さらに、Merchant (2004) では、談話の最初に用いられた動詞句削除は [do it] のような仮定された VP を持っており、指示される行為 (コト) がコンテキストにより顕著になった場合に照応が成立すると考え、これらの問題点としては、仮定された不在言語的先行詞が発話の理解の際にどこにどのように存在するのかが説明されておらず、またコンテキストの定義が曖昧である。

(6) 照応関係は聞き手の心的表示と成立するという考え方: Cornish (1987, 1996) や Bosch (1988) は、不在言語的先行詞という概念も、言語的先行詞をもたない代名詞が言語的制御を受けるという考え方も認めず、有意義なしぐさが先行詞を誘発するものとして、聞き手が談話モデルの中に指示対象の心的表示を作り上げる手助けをすると考える。さらに、Stainton (1996, 1997) は、言語的先行詞を持たずに用いられる動詞句削除は省略ではないと主張する。しかし、これらの説

明の不十分な点として、知覚された環境の中で注意が向けられた指示対象 (モノ) がどのようにして代名詞の性や単数・複数のような数をマークするのか、また、特定の構造をもつ出来事を表す指示対象 (コト) がそうした環境からどのように選ばれるのかが明らかではないなど、言語的制御に関わる問題が説明されていない。

2. 研究の目的

本研究の目的は、Cornish の認知的視点に関連性理論のメタ表示という新たな認知的枠組みで捉え直し、深層照応のみならず、照応全体の認知プロセスを、言語的制御・語用論的制御というこれまでの二分法を超えた認知的制御という一つの原則により統一的に解明することにある。本研究では、照応理解は、聞き手がその指示対象を含んでいる原話者の発話や思考にコミットすること (心的表示をもつこと) によるものであるという独自の視点に立ち、関連性理論 (Relevance Theory) が提唱するメタ表示 (metarepresentation) (cf. Noh (2000)、Wilson (2000)) という認知の側面から統一的な説明を行なう。照応形の指示対象は、照応関係が成立するものになる低次表示 (source representation) としての原話者の発話や思考に対する聞き手の心的表示 (mental representation) の中にアクセスされるという点において、聞き手のメタ表示能力に大きく依存していると言える。人間の認知は関連性志向であり、認知の際に余分な処理労力を必要とする言語的制御・語用論的制御の区別を却下し、メタ表示という概念を用いて、照応が一つの認知的原則に基づき制御されていることを提案したい。

3. 研究の方法

(1) 関連図書の収集と分析-以下のトピックを中心に照応現象との関連性を究明する。

- ① 認知語用論 (関連性理論) 関連図書により、メタ表示および心の理論と照応の分析を行う。
- ② 認知科学・言語哲学関連図書により、メタ認知の仕組みを考える。
- ③ 英語学関連図書により、英語学全体の中での本研究の位置づけを検討する。

(2) データの収集と整理

- ① 言語的発話を先行詞とする照応のデータはもとより、言語的発話を伴わない状況での照応の成立の例をコーパス (小学館コーパスネットワークがサービスを提供する BNC) をもとに収集する。
- ② 照応形とメタ表示的思考の間の解釈的類似性 (interpretive resemblance) の程度を、言語的先行詞が先行談話に存在する場合 (従来の表層照応および統語的省略)、

先行談話に言語的先行詞が存在しない表層照応の場合、先行談話に言語的先行詞が存在しない深層照応の場合、に分けて、それぞれのデータを上記のコーパス等で分類する。

(3) メタ表示を中心に、Bibliography of Pragmatics Online を用いた語用論の文献検索と Handbook of Pragmatics Online を用いた語用論のトピックの確認を行う。

(4) 国内の研究機関への調査・研究指導、および、資料収集と調査研究を目的とした海外出張を行う。

(5) 研究成果の公開

研究期間の途中において、可能な段階で適宜学会発表、学術論文などにより研究成果を公開する。

4. 研究成果

(1) 関連性理論の見方では、言語であろうとなかろうと、選び出された意図明示的の刺激に対して、同一の理解のストラテジーが起動する(cf. Carston (2000: 8))。照応表現の指示対象を同定するための意図明示的の刺激として働く文脈情報が、言語・非言語を問わず、同一の認知の方略に基づいて発話解釈に用いられているとすれば、使用されるコンテキストを分けることなく照応プロセスを統一的な認知の原則で説明することができる。

(2) 関連性理論におけるメタ表示に関わる研究は、引用や仮定法、エコー質問などのメタ表示的発話 (metarepresentational utterance) の分析に関して多数行なわれている。一方、本研究の特徴および独創性は、多くの研究の対象とされてきたメタ表示的発話ではなく、メタ表示的思考 (metarepresentational thought) の観点からメタ表示と照応の関わりを解明するものである。言語的コンテキストと非言語的コンテキストにおける照応プロセスを包括的に扱うためには、照応形は聞き手の心的表示と照応関係を成立させると考えることができる。したがって、言語を用いて他の表示をメタ表示する言語的メタ表示に対して、照応解決には非言語的メタ表示が関わっており、それは低次表示である発話や思考、あるいは状況や事態を心的に表示したものだと考えられよう。高次表示は聞き手の心的表示であり、低次表示は原発話者 (その発話や思考が低次表示として聞き手により表示される話し手) の発話や思考、あるいは知覚表示である。

(3) 最小限度の語彙情報と最大限の語用論的推論により支えられた照応理解の認知プロセスは、関連性理論により認知的に健全なアプローチで説明が可能になる。照応表現 (代名詞や省略) を含む発話を解釈する聞き手は、最も処理労力を要さない形で (最も関連性が高い方法で) 意図された指示対象を確定す

ることができる。照応表現の理解は、代名詞や省略形という言語的糸口をもとにその指示対象を探せという指示を与えるという意味において、飽和 (saturation) という語用論的プロセスによるものである。しかし、照応プロセスは特別なタイプの飽和であると言える。第一に、照応表現は余分な労力を払うことなく指示対象を確定するため言語的あるいは意味的指図が慣習的に符合化された結束表現である。もう一つの特徴は、照応の解釈に用いられる文脈想定 of 構築の仕方にある。照応表現の指示対象の確定は、先行発話や物理的環境などの言語的あるいは非言語的情報をもとにして構築される文脈想定に依存している。このプロセスにおいて、聞き手は言語的あるいは非言語的情報の中の指示対象に直接アクセスするのではなく、それらをさらに表示したもののの中から指示対象を確定していると考えられる。こうした表示の表示 (representation of representation) という認知プロセスは、照応表現の理解がメタ表示 (metarepresentation) に依っていることを示すものである。言語コンテキスト、非言語コンテキストを問わない照応の仕組みを考慮した場合、照応表現を先行発話や物理的な事物や事態の中の指示対象に直接的に関係づけるのではなく、指示対象の心的表示との間に成立させるやり方は、一見すると回りくどいプロセスのようにも見えるが、最適な関連性の見込みに合致したやり方であると言えよう。

(4) 照応プロセスにおいて、聞き手がまずアクセスするよう期待されているものは、注意に値するだけ十分に関連性ある原発話者の公的表示や心的表示、あるいは知覚表示である。次に、意図された指示対象を確定するために、聞き手は低次表示と多少なりとも類似したメタ表示的思考にアクセスすることになる。原発話者の発話や思考への直接的なアクセスによる照応が困難である以上、低次表示と形式や内容が類似した心的表示に頼る照応プロセスは、余分な労力を払わずに認知効果を得ることで関連性の見込みを満たすものであろう。照応表現が行なうこのような発話解釈の指図を考えると、照応表現が符合化する意味はまさに手続き的だと言える。例えば、動詞句照応が発話の表意形成に課す一般的制約は、「低次表示の心的メタ表示の中から、照応表現の語彙的特徴と一致する指示対象を探せ」と定義できる。

(5) 照応理解の際に聞き手が構築する文脈想定は、低次表示の心的表示に他ならない。したがって、メタ表示された文脈想定 of 呼び出し可能性は、それが構築される容易さあるいは難しさ、つまり2つの表示の間の類似性の度合いと関係がある。類似性の度合いは、統語的省略のような照応表現では形式上の類似性が高いために、メタ表示的想定 of 呼び

出しが容易であるが、“do it” 照応のように推意を介してでしか2つの想定の中の類似性が認知できない場合にはそれが難しい。照応解決(anaphora resolution)において、2つの想定の中の類似性は、それが最小限度の処理労力で最適な認知効果を生み出すという点で、関連性の見込みを満足するものである。しかし、一方でメタ表示的想定と呼び出し可能性とそれに要する労力は照応形のタイプや用いられ方により異なるというのも事実である。この問題に対して、呼び出し可能性と処理労力の違いは、低次表示とメタ表示の間の類似性の程度に起因するものであると考える。また、推意を介して指示対象にアクセスする照応プロセスは多くの処理労力を要するが、それを相殺する認知効果(弱い推意の派生など)を伝達することで、最適な関連性は保証されていると言える。

(6) 深層照応と直示表現を同一視するかなのような語用論的制御の考え方には早い段階から異論が唱えられてきた。両者の間で、聞き手の注意を対象に向けさせる働きは異なる。直示表現は、聞き手の注意を直示領域の一部である特定の項目へ向けることを達成する言語的手段であるのに対して、照応表現は、話し手がすでに注意を向けた特定の項目に対する焦点を維持させるための言語的手段である。直示表現の指示対象がコミュニケーションの進行過程で活性化されるのに対して、深層照応の指示対象は認知的きわだちの度合いが高い。Ehlich (1982: 325- 331)やCornish (1996:22)も一致して指摘するように、2つの言語表現は聞き手の注意の焦点(attention focus)を極めて異なる方法で操作しているように見える。直示表現は、聞き手の注意の焦点を談話において既存のものからコンテキストにより派生された特定のものへと変化させる働きがある。それに対して、照応表現は、注意の焦点を聞き手の頭の中にすでに確立されたまま保つように指図している。照応表現のこうした独自の働きは、低次表示としての発話や思考のメタ表示的想定に照応関係を結ぶという認知的理由によるものであろう。メタ表示という概念は照応表現と直示表現の理解のされ方を明確に区別することができる点で有効となるであろう。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計4件)

- ① 大津隆広 「照応とメタ表示-動詞句照応が符号化する手続き」、『ことばを見つめて』英宝社、査読有、2012年、37-47頁。
- ② Takahiro Otsu, “Relevance-theoretic Account of Anaphoric Processes: the

Application of Metrepresentation and its Implications,” *The Said and the Unsaid: Papers on Language, Literature and Cultural Studies*, Armela Panajoti (ed.), University of Vlore “Ismail Qemali”, 査読有、2011年、182-194頁。

- ③ Takahiro Otsu, “Anaphora and Meta-representation: Accessibility of Contextual Assumptions,” *Studies in Languages and Cultures*, 査読有, Vol. 26, 2011年、145-153頁。
- ④ Takahiro Otsu, “Procedural Information of Anaphoric Expressions: Pronouns, Ellipses and Metarepresentation,” *Studies in Languages and Cultures*, 査読有, Vol. 25, 2010年、113-129頁。

[学会発表] (計3件)

- ① Takahiro Otsu, “Relevance-theoretic Account of Anaphoric Expressions: Meta-representation and the Accessibility of Contextual Assumptions,” 12th International Pragmatics Conference, 2011年7月4日, University of Manchester.
- ② Takahiro Otsu, “Procedural Information of Anaphoric Expressions: A Relevance-theoretic View,” *The Said and the Unsaid: First International Conference on Language, Literature and Cultural Studies*, 2010年9月13日, University of Vlore.
- ③ Takahiro Otsu, “Procedural Information of Anaphoric Expressions: A Metarepresentational Account,” 11th International Pragmatics Conference, 2009年7月13日, University of Melbourne.

[その他]

ホームページ等

<http://hyoka.ofc.kyushu-u.ac.jp/search/details/K001753/research.html>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

大津 隆広 (OTSU TAKAHIRO)

九州大学・言語文化研究院・准教授

研究者番号：90253525